観成園だより

発行：特別養護老人ホーム　観成園
長野県駒ヶ根市赤穂 3214-1
tel(0265)83-1611　fax(0265)83-1616
ホームページ：http://inanfukushi.or.jp

梅雨、そして夏へ

暑い日と肌寒いが交互に来て、不思議な気候が続いてますね。
園のアジサイ(写真はしゃくなげユニットかた見えるアジサイです)も花が開き、綺麗に咲いています。
暑い日も増えてきました。そろそろ夏本番です！！！

そんな少しどんよりな
天気を吹き飛ばす
７ 月のイベントごと

- **７月７日「七夕飾り」**
- **７月２日　のぞみ会**
- **７月 10 日　カラオケボランティア**
- **７月 23 日　MMC**
- **７月 28 日　夏祭り　（特別号にてたっぷり紹介!!）**

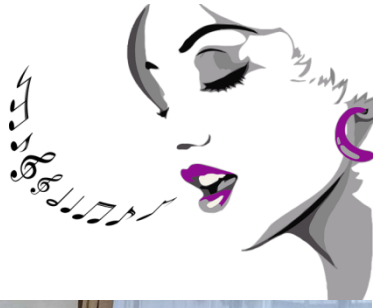
七夕飾り

七月といえばやはり七夕ですね！！
たくさんの飾り付けのされた笹が1階、2階にそれぞれあり、とても華やかになりました。
短冊もたくさん飾られており、様々な願い事がありました。　みなさんは何をお願いしましたか？？

のぞみ会

毎年訪問していただいています。今回は５名のボランティアさんが皆さんに会いに来てくださいました。「かっぽれ」など歌に合わせて踊りを見せてくださり、衣装もまた素敵でした。入居者さんからも人気があり多くの方が楽しんだひとときでした。
のぞみ会の皆様、ありがとうございました。

カラオケボランティア



藤沢ケンジさんに昭和歌謡中心に、童謡を一緒に唄いました。ご自分で歌を作りＣＤも出しています。毎月来ていただけることになりました。いい声をしていますので、聞きに来てくださいね。

観成園にて勤め始めた（異動してきた）職員をかる～く　紹介

新人職員紹介

新人の職員さんに観成園についての印象を尋ねてみました！！

- お風呂の種類がたくさんあり、ご利用者様にあった入浴ができそうである。
- 一人ひとりに寄り添ったケアができている。
- ユニットケアである為利用者様の理解が深くなる。
- 施設全体的に明るく、綺麗である。
- 設備自体も最新である。
- 施設にいる職員も明るい方が多い。

正樹君と詩話さん

その昔、一年にとある日にしか会えなくなってしまった一つのカップルがいたそうだ･･･。

「こんにちは、詩話さん」
　子供の声がする。これは最近この地に越してきた正樹くんのものだ。彼のほうを向き、笑顔で返す。
「いらっしゃい、正樹君」
「詩話さん、今日も楽しいお話聞かせてよ」
　正樹君は童話が大好きな子だ。最近ではこの図書館に来ては私にそう請う。読み聞かせ類のことは苦手だと何度断っても私がいいのだと彼は言う。
　まだ五つの子だ。わがままが言いたい年頃なのだろうと私も、その他の司書たちも気にした様子はない。
「人も少ないし仕方ない」
　ため息混じりに言うと正樹君は花を撒き散らしながら喜んでいた。

「それじゃあ、今日は七夕に因んだお話でもしようか」
　織姫と彦星の描かれた絵本を取り出す。今日はちょうど七夕なのだ。午後には近くの保育園でもこの本は読まれるだろう。彼は少しだけ速めにこの話を知ることになる。
「七夕にちなんだおはなし･･･？」
　正樹君はその大きな瞳をきらきらとさせながら私の話に耳を傾けた。

「これは昔のお話。一年に一度だけ会うことを許された悲しい恋人たちの話だよ」
　そう前置きをして有名な七夕の話をする。恋にうつつを抜かした二人が周りの制約により、七夕の、しかも星の出ている夜にしか逢引できなくなってしまったお話。絵本に書かれているものを見ながら私はそんな二人が今日は出会えるだろうか、と一人かんがえていた。

「めでたしめでたし」
　絵本をそう締める。
　正樹君は絵本より目を離すと私を見てきた。
「詩話さんはどう思う？」
「何がだ？」
「一年に一度しか会えないなんて寂しい？それともやっぱり仕方の無いことなのかな」
「･･･まあそれもそうだろうね」
「約束なんて破って会いに行けばいいのに」
　正樹君の言葉に思わず笑う。すると彼は珍しく声を荒げた。
「僕ならそうするよ！だって好きな人とは毎日でも会いたいもん」
「ほお･･･正樹君にはそういう人がいるのかい？」
「え･･･そ、それは」
　彼はとたんに頬を赤らめる。非常に可愛らしい反応である。
「･･･詩話さんにだけは言わない」
「そ、そうか」
　彼はふいとそっぽを向いてしまった。どうやらデリカシーのないことをしてしまったらしい。どう謝罪しようか悩んでいると正樹君はこう言った。
「あと二十年後に詩話さんには教えてあげるよ」
「おいおい。それはえらく長いな」
「そのときまで詩話さんはここにいてね」
「そうだな。考えておく」
　ふふっと笑うと正樹君はまた拗ねたように怒ってしまった。

　しかし･･･、なぜ二十年なのだろうか。

　その答えは彼が 25 歳になったときに判明することになる。
「詩話さん、僕･･･彦星とは違うんだ。ずっとそばにいさせてほしい」